

彙報

○早稲田大学史学会・連続講演会

「わたしと歴史学、わたしと考古学」

(於文学学術院校舎)

第一回 二〇〇九年五月十九日(火)

私と歴史学の不確かな関係

藤野 裕子(日本史)

中央アジア史研究への道

野田 仁(東洋史)

人間学としての歴史研究

—古代ローマ史研究の視点から—

梶田 知志(西洋史)

シルクロードに魅せられて

—海外調査の現場より—

田中 裕子(考古学)

第二回 二〇〇九年五月二十五日(月)

早稲田で歴史を学ぶこと

真辺 将之(日本史)

中国史研究の空白領域に挑戦する

飯山 知保(東洋史)

歴史のなかの《事実》と《虚構》

蝶野 立彦(西洋史)

早稲田で考古学を学んで

小野本 敦(考古学)

趣旨と経過

工藤 元男

史学会恒例の若手研究者による連続講演会は、二〇〇九年五月十九日(火)・二十五日(月)に行われ、多くの聴衆者を集めた。全体タイトルは今年も同様「わたしと歴史学、わたしと考古学」である。この企画が始まってから随分年月がたったが、助手や非常勤講師となっている私の元学生も依頼されることがあるので、ときどき拝聴してきた。そのたび参加しても、つくづく

学の四分野から、学部学生諸君に対して熱いメッセージが発せられた。最近このような報告会で思っていたことは、「学問の発展」ということである。人文科学はこれまで提出された膨大な研究の堆積層のような一面があり、古い学説も学説史の中にきちんと位置づけられて、顧みられる。それは実験と観察によってデータを塗り替えてゆく理系の学問とは、質的な違いがあるように思われる。

「学問の継承と発展」という言葉が自然と浮かんでくる。報告者がどの先生の元学生で、現在、それを継承した分野でどのような新研究を開拓しているのか、それを聴くことは、たとえ自分と研究分野がちがっていても、とても興味深いものがある。

ところが、若手研究者の報告を拝聴していると、人文科学の研究もやはり発展し、それは必ずしも単に「新しい展開」(研究領域の拡大)などという意味ではなく、理系における学問の発展と相応するような「発展」があると思われてくる。このことは今回の報告においてのみならず、院生を指導しながら最近感じることでもある。

今回も、日本史、東洋史、西洋史、考古

その背景にはさまざまな要因があるが、例えばこういうことが考えられる。戦後歴史学において提起され、多くの議論が重ねられてきたいくつかの難問も、最近、若手

研究者によって次第に解かれつつある。それには学問環境の変化も少なくない。我々の分野について言えば、出土文字資料の増加、漢籍の一字検索ができるデータベースの普及、中国や韓国の研究機関との共同のフィールド調査、研究成果をリアルタイムに発表できるサイト（武漢大学の簡帛網など）等々で、総じて言えば、コンピュータ環境の発達と海外との共同研究の進展というべきか。この両者はもはや後戻りのできない学問推進の牽引車となっているのである。

〈第一回〉

私と歴史学の不確かな関係

藤野 裕子

「わたしと歴史学」というお題目には若干とまどうものがあります。現在私と歴史学との関係は非常に揺らいでいて、確たるものとして説明できないからです。でもも

しかしたら、この不確かな関係を不確かなままお話しすれば、専攻を決めようとしているみなさんに何がしかのヒントになるかもしれない。このようにも思います。

前提としてですが、大学での歴史学の学び方は高校の歴史の勉強とは大きく異なります。大学での歴史学には、教科書のような「答え」がありません。それどころか「問い」もありません。自分で問いを立て、調べ、答えを考えなければなりません。さらにそれを誰かに伝える。そこまでやって初めて学問になります。つまり学問としての歴史学には、①問いを立て、考える主体である「自分」、②調べる「対象」、③考えを伝える「相手」、の三つが新たに加わってきます。私と歴史学の関係が不確かに揺らぐ原因もここにあります。殊に①③は、決して固定的ではないからです。

私が①②③を明確に意識するようになったのは修士論文を書いている最中でした。論文のテーマは、一九〇五年に東京で起こった日比谷焼打事件という大規模な暴動でし

た。その暴動がどのようにして起きたのか、知りたくてたまりませんでした。

そこで私はこの事件の裁判記録を読み、起訴された暴動参加者の一人一人の行動をたどってみました。その結果浮かびあがった事実は、次のようなことです。暴動の夜、日比谷公園周辺から交番の焼打が始まり、徐々に東京市全体に広がります。しかし最初から最後まで暴動に参加した人は多くありません。ほとんどは仕事帰りなどにたまたま暴動に出くわし、面白半分に見物するうちに自らも焼打に加担しはじめた人たちでした。これには驚きました。もし私が街で交番に火を付けている集団を見かけたら、怖くてその場を離れます。決してそこに加わらないでしょう。一〇〇年前の暴動参加者と今の私とは、暴力と秩序の感覚が根本的に違う。このことに気づいたとき、自分の中で①②③の関係が明確になりました。

その頃の私は、この秩序だった社会に言いようのない息苦しさを感じていました。見えない力によって自分のふるまいや身体